

『源氏物語忍草』における薫

―「わがもの」からみる人物造型―

森木 三種

(二〇一九年一月三十一日受理)

キーワード 『源氏物語忍草』 薫 わがもの

一．はじめに

『源氏物語忍草』は『源氏物語』の梗概書として、北村湖春により元禄初年頃に執筆された。『源氏物語』の懇切で平明な梗概書と評価され、五巻からなる。写本は十種あり、本稿では天保五年六月に成島司直が序文を記した版本を底本とする『源氏物語忍草の研究 本文・校異編 論考編』(注1)を『源氏物語忍草』本文とし、その表現を『源氏物語』本文の表現と比較することでその特徴と『源氏物語忍草』における人物造型を検討することを目的とする。なお、『源氏物語』本文は『新日本古典文学大系』(注2)により、引用文中の傍線は稿者によるものである。

二．『源氏物語』における「わがもの」

『日本国語大辞典』によると「わが」は「自分が所有していたり、深い関係にあったりする物事を自分の立場から指示する時に用いる」(注3)語で、「わがもの」は「自分の所有物 自分のももの」(注3)とし、後述する

『源氏物語』若菜下巻の用例を挙げている。

『源氏物語』において「わが」は四〇八例あり、その中で「わがもの」は七例ある。一つ目の用例は帚木巻において雨夜の品定めをしている左馬頭である。

「おほかたの世につけて見るには咎なきも、わがものとうち頼むべきを選らんに、多かる中にもえなん思ひ定むまじかりける。

(帚木 三八頁)

ここでの「わがもの」とは「妻」を指し、世間一般には特別な問題がなくとも、妻として迎える女性を決めるのは難しいという考えが述べられている。同じように「わがもの」が配偶者を指す例が若菜下巻、東屋巻にある。

まず、若菜下巻では夕霧が女三宮に対して

宮をば、いますこしの宿世をよばましかば、わがものにも見たてまつりてまし、心のいとぬるきぞくやしきや、院はたびくさやうにおもむけて、しりう事にもたまはせけるを、とねたく思へど、すこし心やすき方に見えたまふ御けはひに、あなづりきこゆとはなけれど、いとしも心は動かざりけり。

(若菜下 三四〇頁)

と述べ、女三宮と強い因縁があれば自分の妻としていただろうとする。また、東屋巻には

この君はさすがに尋ねおぼす心ばへのありながら、うちつけにも言ひかけ給はず、つれなし顔なるしもこそいたけれ、よろづにつけて思はてらるれば、若き人はまして、かくや思はてきこえ給ふらん、我がものにせんと、かくにくき人を思ひむこそ見ぐるしきことなべかりけれ、など、たゞ心にかゝりて、ながめのみせられて、とてやかくてやと、よろづによからむあらましごとを思つゞくるに、いとかたし。

(東屋 一七〇頁)

中将の君(浮舟の母)が匂宮や薫と縁ができたことで、左近少将を浮舟の婿にしようという以前の自らの考えを後悔する場面である。ここからは「わがもの」が男性から見た妻を指すだけではなく、婿という意味を含有し、配偶者を指す表現であることがわかる。

また、『源氏物語』における七つの用例のうち、残る三例は薫が、一例は匂宮が「わがもの」を用いており、前述の「配偶者」という意味ではなく、すべて「自分のもの」という所有物である意味で使われている。

中納言殿聞き給て、あいなくものを思ありき給。わがあまり異やうなるぞや、さるべき契やありけむ、親王のうしろめたしとおぼしたりしさまもあはれに忘れがたく、この君たちの御ありさまはひも、ことなる事なくて世に衰へ給はむことのおしくもおぼゆるあまりに、人々しくもてなさばやと、あやしきまでもてあつかはるゝに、宮もあやにくにとりもちて責め給しかば、わが思ふ方は異なるに、譲らるゝありさまもあいなくて、かくもてなしてしを、思へばくやしきもありけるかな、いづれもわが物にて見たてまつらむに、咎むべき人もなしかし、ととり返すものならねど、おこがましく心ひとつに思ひ乱れ給。

(総角 四四〇頁)

句宮の外出に対する帝の監視の目が厳しくなり、宇治への訪れが難しくなつたことを受けて、中の君と句宮を手引きしたことを薫は後悔する。そして、大君、中の君の二人を自分のものとして世話をしたい(注4)という表現や、

ゆゝしきまで白くうつくしくして、たかやかにもの語りし、うち笑ひなどし給顔を見るに、わがものにて見まほしくうらやましきも、世の思離れがたくなりぬるにやあらむ。されど、言ふかひなくなり給にし人の、世の常のありさまにて、かやうならむ人をもとめをき給へらましかばとのみおぼえて、この比面立たしげなる御あたりに、いつしかなどは思寄られぬこそ、あまりすべなき君の御心なめれ。

(宿木 一〇四頁)

というように、薫は句宮と中の君の間に生まれた若君を自分のものとしてみたいと思ひ、亡くなった大君が子を残してくれていたらと後悔する場面もある。また句宮と薫のそれぞれが浮舟に対して次のように述べている。よろしうなりあはぬところを見つけたらむに、さばかりゆかしとおぼししめたる人を、それと見てきてやみたまふべき御心ならねば、まして隈もなく見給に、いかでかこれをわが物にはなすべきと、心もそらになり給て、なをまもりたまへば、右近、「いとねぶたし。よべもすゝろに起き明かしてき。つとめてのほどにも、これは縫ひてむ。急がせ給とも、御車は日たけてぞあらむ」と言ひて、しきしたるものどもとり具して、き丁にうちかけなどしつゝ、うたゝ寝のさまにより臥しぬ。

(浮舟 二〇二頁)

句宮は浮舟の存在を知り、なんとか自分のものにできないかと思ひ、浮舟と女房たちの様子を覗き見る場面である。また、

宮もかゝづらひ給ふにては、いみじうあはれと思ながらも、さらにやがて亡せにし物と思なしてをやみなん、うつし人になりて、末の世には、黄なる泉のほとりばかりを、おのづから語らひ寄る風の紛れもありなん、我ものにとり返しみんなの心ち又つかはじなど、思乱れて、猶のたまはずやあらんとおぼゆれど、御けしきのゆかしければ、大宮にさるべきつゝめでつくり出だしてぞ啓し給。

(手習 三八五頁)

薫は浮舟がいなくなり、死んだと思っていたが生きていることを知り、自分のものにとり返したいと思うがその気持ちを諦めよう、という場面である。

これらの句宮や薫の用いる「わがもの」は前掲の配偶者を指す「わがもの」とは異なり、所有物という意味合いが強く表れている。特に手習巻には「とり返し」て自分のものにしたという表現があり、元々も自分の所有物であったにもかかわらず、どこかへ行つてしまつた。だからもう一度自分のものとして「とり返し」たい、という所有に対する強い思いが読み取れる。そしてその気持ちを諦めるといふことは本心では所有したいが、ということの表れであろう。

なぜ、薫や句宮の「わがもの」は所有の意味合いが強いのだろうか。

薫や句宮の「わがもの」にしたい対象は大君、中の君、中の君の若君、浮舟である。これらの人物に共通することは立場の弱い存在であり、保護すべき存在という点ではないだろうか。そして大君、中の君、浮舟は零落した宇治八の宮の娘であり、都を離れた場所で暮らす存在である。後ろ見の無い、不憫な存在である。そのような不遇の境遇である女性に対して軽視するともとれる意識の表れが「わがもの」という言葉の使い方なのではないか。これは他の女性と婚姻関係を結んだ句宮も浮舟以外には用いていない表現であり、婚姻関係や恋愛関係にある女性みなに対して用いていないのではない。光源氏も多く女性の心に心を寄せ、様々な身分、境遇の女性と関係を結んできたが、「わがもの」とは表現していない。大君、中の君、浮舟は薫や句宮の「わがもの」の対象として描かれることで、その不遇さ、立場の弱さをより顕著にしていると見えよう。光源氏が多くの女性と関係を結んでいてもそこに相手を所有しようとする意識は「わがもの」と

いう表現を起点にしたとき、見えてこなかった。一方の薫や匂宮は光源氏の子孫として描かれているものの、女性に対するまなざしの違いがここから浮かび上がってきた。

また、薫が「わがもの」を用いる場面は後悔の念を伴っていることも特徴である。心中では自分の所有物として扱いたいという願望や欲が後悔という形で表現される。道心を抱き、俗聖人の宮を憧憬した薫の欲を捨てられない俗の部分、身と心の乖離した姿が「わがもの」という表現に表れているのではないだろうか。

三．『源氏物語忍草』における「わがもの」

『源氏物語忍草』において、「わがもの」という表現は六例あり、すべて薫の心情を表す場合にのみ使用されている。またその六例は『源氏物語』本文の引用ではないことから、『源氏物語忍草』における薫像を描く際に北村湖春が意図して使用したと言えよう。

御簾ごしの対面は常にせさせ給ふかほるは橋姫の巻に、琵琶ことひき遊ひ給ひしを覗て見給ひし後は、道心もさめて、いかで是を我物にせんと心にかゝれど、聖の道に心ざしありとて、まうで来りし身が、今更此道をほめかさんも、人のおもはく、はずかしければ、少も色に出さで過し給ふ

(椎本 二八四頁)

かほる心の内には、かくてはえ過しはつまじ、中の君をは匂ふ宮へ奉り、姉君をば我がものにと思す、女の御身はかくても過ぎし給ふべきにあらず、いづかたへいかやうにとかおぼす、

(椎本 二八六頁)

この二例は『源氏物語』では見られない、今現在の思い、つまり、現在進行形の薫の心情表現として「わがもの」を使用している。大君への思いを薫が直接的に表現していなくとも、読者にとって薫の大君を「わがもの」にしたいという欲は明らかであったからこそ、大君への思いと聖の道への道心とで揺れ動く薫像が描かれているのだろう。そして「わがもの」を使

うことでよりその葛藤が鮮明に描かれていると言えよう。また、梗概書という点からも、後述する後悔の念と共に表現される「わがもの」にしたい欲求を現在進行形で取り入れることで、より薫の身と心の乖離、理想と現実の乖離する姿を表現することが可能になる。

一方、『源氏物語』同様に後悔の念と共に過去を振り返り、「わがもの」表現が使われている例もある。「わがもの」にできなかったのは大君である。かほるは、大君を我ものにもせず、かく空しく見なし給ひし悲しさの、心余るをも、誰にか語らんと思し侘て、匂宮へ参りて、しめやかに聞えかはし給ふ、

(早蕨 三〇〇頁)

かほるもおはしまして、住なれ給ふをうれしとおぼす、されど我物にせざりしくやしきぞ、月日にそへていやましける、

(早蕨 三〇二頁)

八の宮の御正つきのとふらひを、かほる念比にし給ふ其悦びなどをまづ聞え給へり、かほるはよき折ふしなれば、我ものにせざりし悔しさも、せめてかたらんと思して、まことやかに申うけたまはりたき事も侍るに、今少しちかくよせ給へと聞え給へば、げにと思して寄給ふもむねつぶれて思す、

(宿木 三一七頁)

このように大君を失ったことへの後悔の念は強く、「悔しさ」「空しく」「悲しさ」という語とともに「わがもの」にできなかったことを嘆いている。また、浮舟が失踪しても

かほるは物を思ひ／＼のはてには、大君おはしまさば何しに心を外へ分ん、

(蜻蛉 三四〇頁)

というように、大君さえ生きていくれたら浮舟に心を寄せることもなく浮舟が入水自殺を図り失踪するという悲劇は起きなかつたという。これらの記述からも薫の大君への思いの強さ、執着の強さがうかがえる。他にも現在進行形の心情表現であり、薫の「わがもの」の対象に『源氏物語』にはなかつた中の君が挙げられている用例がある。

いとゞ有しより思ひ乱れて、何かは歎き給ふらむ、匂ふ打捨給はゞ、

我物にて見奉らんと。たゞ此事のみにおきふしおぼし侘る。

(宿木 三〇八頁)

大君を失い匂宮との関係に苦悩する中の君を、匂宮が捨てたならば自分のものとしてお世話したいと思う、という場面である。これは中の君への執着というよりも、大君の形代として中の君を手に入れたという願望であり、つまりは大君への執着の表れではないだろうか。また、『源氏物語』では浮舟に対する「わがもの」表現があったが、『源氏物語忍草』には無かった。この浮舟に対する執着も蜻蛉巻の用例のごとく、大君の形代としての浮舟、という認識ゆえに『源氏物語忍草』には用いられなかったのではないだろうか。

四．おわりに

ここまで『源氏物語』と『源氏物語忍草』における「わがもの」の用例について検討した。『源氏物語忍草』において「わがもの」を用いるのは薫のみであるという点、『源氏物語』においては「わがもの」の対象であった浮舟が『源氏物語忍草』では対象に入っていない点の特徴として挙げられる。また、『源氏物語忍草』は『源氏物語』本文と対応、引用して「わがもの」を用いているのではなく、『源氏物語忍草』として薫という人間像を作りあげる時に「わがもの」という言葉を用いている点があるといえる。

中西健治氏は『源氏物語忍草』の梗概率から

できるだけ原作を圧縮しようと思図して臨んでいるかと思われる蜻蛉なきや手習巻は宇治十帖にあつて必ずしも分量的に少ない巻ではないにもかかわらず、なぜに梗概率が大きいのかという点については、例えば蜻蛉巻は源氏物語の中では最も心中表現の多い巻であること、手習巻も同様な表現が比較的多くあることがそのこと関連がありそうに思えるし、(注5)

と述べている。このことを踏まえると、前掲の『源氏物語』手習巻の薫から浮舟への「わがもの」表現が『源氏物語忍草』では取り上げられなかった理由も心中表現であったため、と言えるのだろうか。また、

忍草はあくまでも光源氏とその周辺の人物像および動静にこそ関心が

向けられていたのであつて、浮舟失踪後の薫、匂宮の苦悩を述べ立てる箇所やその後の浮舟が小野の山里でひそかに暮らす心境には筆を惜しんだのではないか。(注5)

とし、浮舟に対する薫や匂宮の記述が少ないのは筆者が重きを置いたのが光源氏物語であつたとする。その一方で、

宇治十帖はいわゆる第三部と称されているが、桐壺巻から藤裏葉巻までの第一部、若菜上巻から幻巻までの第二部に比べて心中表現が次第に多くなり、巻ごとの分量も多くなっている。そのため湖春は男女の微妙な心理の葛藤に筆を費やすことを避けているのは勿論のこと、とくに仏道に生きようとする薫の姿に惹かれているかのような書きぶりが目立っている。「薫は」という文言が目立っているのでもある。(注5)

と述べる。中西氏が指摘するように、浮舟に関わる薫の心理描写の記述が少なく、湖春が重視していなかったという指摘に同意できる。しかし、「わがもの」という表現を起点として『源氏物語忍草』の薫を見たとき、「仏道に生きようとする薫の姿」というよりも『源氏物語』に描かれている以上に欲を持ち、俗世の絆を捨てられない、むしろ自ら求めるかのような薫の姿が浮かび上がる。北村湖春は『源氏物語忍草』において、俗聖を憧憬し、仏道修行に励もうとする薫の捨てきれない心の部分を拾い上げ、「わがもの」という表現を用いることで薫の葛藤をより鮮明にそして悩ましく描き上げたのではないだろうか。

(注)

1. 『源氏物語忍草の研究』本文・校異編 論考編』中西健治編著 二〇一一年一月 和泉書院
2. 『新日本古典文学大系一九〇三』柳井滋 室伏信助 大朝雄二 鈴木日出男 藤井貞和 今西祐一郎 一九九三年一月〜一九九七年三月 岩波書店
3. 『日本国語大辞典 第二版 第十三巻』日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部 二〇〇三年三月一〇日 小学館
4. 『新編日本古典文学全集』(小学館)および『新日本古典文学大系』(岩波書店)ではどちらも「自分のもの」と訳されている。

5. 中西健治「一 源氏物語の隠れた読み巧者―北村湖春の人と仕事―」
（『源氏物語忍草の研究 本文・校異編 論考編』中西健治編著
二〇一一年一月 和泉書院）